

目が覚めた時に彼が隣にいないことは、いつものことであった。彼の朝は早く、ただしその代わりに帰りも早い。

逆に自分の朝と帰りはそんなに早いということも無く、それなのに夜を自分に合わせてくれていることを、最初の頃はひたすらに申し訳無く感じていたが。彼は献身好きであった為に、私に合わせられることは幸せなことだと、その度に額に口付けてくれた。あまりにも「幸せだ」と、笑いながらそうするものだから。その罪悪感はゆるゆるとほどけ、——そして、その幸せに付随する朝の静けさにも、次第に慣れていった。

だって、それは、あまりにも贅沢で我儘だ。夜を合わせてくれているのに、……よもや、朝が寂しい、だなんて。

ほどけた夜の罪悪感と入れ替わりに抱えているこの気持ちだけは、表せるはずもなく、心の中の「普段は思い出さなくていいこと置き場」に蓋を被せている。

だからこそというか、休日の度に、目が覚めてもすぐ傍にいてくれる実感が、安堵を更新するのだった。

普段がそうであるせいか、彼の朝は、休日でも早いようだ。「ようだ」というのは、私が彼よりも先に目覚めたことが無い為だが。

だって、私の目が覚めた時には、彼は大抵、着替えも済ませてゆっくりとした朝の時間を過ごしている。そうして、遅れて起き出してきた私に、やわらかなカフェオレの香りを纏わせながらおはようと笑うのだ。

と、いう前提を踏まえた上で。

「……。」

ぼんやりとした目覚め、からの、視界に映っているものを理解した途端の衝撃たるや。

いつの間にか持っていたスマホが手の中でピコン、と鳴っていた。無意識だった。いや撮るでしょ、これは正当な主張のはずきっとだいじょ、えっだいじょばない何だこれは？

驚きすぎてまじまじと見てしまい、まじまじと見ているということに気付いた瞬間即行で目を逸らした。

駄目だこれ以上は、折角貴重なのに、減る。

「……何だこれは……何だこれは……？」

取り敢えず、減ると困るので、うっかりこの視界に入らないように自分の枕で塞いだ。「んぐっ」と小さく鳴かれた気がしたが、きっと気がしただけである。

混乱したままに、手元の虚像の方を見る。

「……」

……えっ……何だこれ……。

啞然。

見ても見ても見ても、排出率 0.2%の初スチルに現実味が無い。

動揺にふらつく指で、ようやく時刻の表示を確認した。いつもの目覚めより、ずっと早い時間——安堵で、力が、抜けた。

「ああ……、……私が早く起きちゃった……だけ、かあ」

よかった……彼がどうかしたのではなく、不調なのは自分の方らしい。

それならば特に懸念し続けることもなかった。

そっと顔まで毛布を被り直す。枕が無い頭の高さには違和感があるが、安寧の為なので致し方あるまい。

次に目が覚めた時は、いつも通りの平穏な世界であることを信じて。

「こら待てわるいこ何普通に寝直そうとしてるんだ、ん？」

「やめてくださいレアスチルなんですよやめてください……やめてよオ！！」

世界は無慈悲。泣いた。

夜明けの夢に、永愛。

\*

1,247 文字